

藤家洋一・原子力委員長に聞く

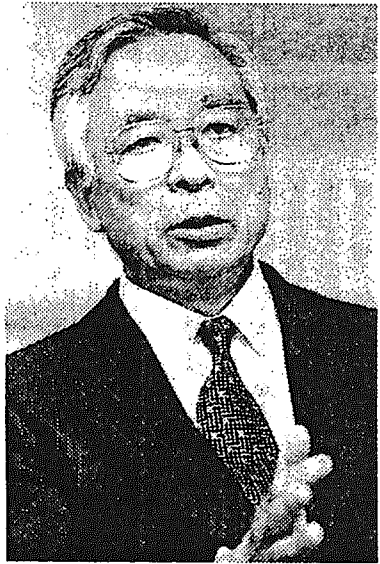
国の原子力政策を審議する原子力委員会が中央官庁の再編により内閣府に移行した。他省庁よりも一段高く位置づけられる内閣府に移ったことで、原子力政策全般にわたって、関係者の間ではこれまで以上に委員会のリーダーシップの発揮に期待がかかる。当面は昨年決定した原子力研究開発長期計画(原子力長計)の具体化をはじめ、懸案となっている核燃料サイクル政策への対応などが課題と見込まれる。学識経験者として初めて原子力委員長に就任した藤家洋一氏に抱負を交えて今後の取り組みを聞いた。

内閣府に移行

——委員長就任の抱負は。
「高度に民主主義が進んだ国ではどんな政策でも国民や社会の理解と支持がなければ、順調に進められない。そういう観点から、第一に、いつでもどこでも、だれでも對話に心がけたい。原子力委員会は原子力基本法、委員会設置法で位置づけられており、法律の枠内でどう取り組んでいけばよいかを改めて考えている。現状の変化に望ましい原子力政策を見極め、原子力

の好ましい状況をつくりたいと感じた。国会議員には国際感覚、政策立案能力、学識知見、指導力、調整能力を求め、意見が多岐、それらと同じことがまさに原子力委員会や

——内閣府移行で新たなスタートを切ったわけだが、委員会の役割として求められていることは。
「正月の新聞で見かけた国会議員に関する世論調査で最近の国民意識がよく出ている



メモ

「自分が就任するかどうかは別にして、学識経験者として最初の委員長に原子力の専門家が就いたことは大事に受け止めている」とは委員長就任の率直な感想。原子力の専門家として阪大や東工大で教鞭をとった後、95年に原子力委員に就任、98年1月から委員長代理を務めるなど原子力一筋に歩む。「重い仕事ではあるが、数年前から見ると着実に課題が克服され、よい状況にある。依然として逆風には変わらないが、全力投球し、明るい方向にいくよう努力したい」と力を込める。趣味はゴルフ。「じっとしているより、アクティブに動く方が向いている」。持ち前の行動力で原子力委員会の新境地を切り開くことができるか。兵庫県出身、65歳。

機動的な審議体系検討

計画進める際の調整役も

委員に対して求められているし、今回の移行はメリットにすぎない」と考えている。内閣府に移ったことは原子力政策を進める上で、計画を遂行するにあたって調整を行う委員会の役割も発揮できると考えている。新たに取組むこととしている

タスクフォース

——委員会の運営に関し、タスクフォースの運用について、専門領域を五人の委員でカバーしきれるとは思っていない。今後は委員会に属するタスクフォースのような形に発展することもあるだろう。

また、原子力委員が専門部会やタスクフォースの座長になり、積極的に審議に参与しても構わないと思っている。研究開発も必要性を評価することによって、やめることもありうる。——核燃料サイクル政策への対応は。
「軽水炉の開発は成熟した。核燃料サイクルは二十一世紀に持ち越された。技術移転問題をどう解決するか、国民の協調体制をどう構築していくかが大きな課題だ。こうした評価も進めていきたい。核燃料サイクル政策を含め長計を誠実に積極的に具現化し、着実に進めていくことが重要で、そのプロセスがますます大事だと認識している」

評価機能明確化

——当面は原子力長計の具現化が大きな仕事となるが。「長計のフォローアップに際して、原子力委員が担当分野を決め、どのように進めていくかを三月までに整理した

審議していくことも検討している。今回の長計ではこれまでのようなキャッチアップ型でタイムスケジュールを優先するものではなく、理念先行で課題解決型に変えていくというところから始まった。時代の変化に伴って、委員会として研究開発や政策の評価機能を明確化することが重要だと思っている。研究開発も必要性を評価することによって、やめることもありうる」